

あとがき

1989:画廊のしごと

当画廊恒例の現代人物肖像画展も今回で第10回目を迎える。今回の収録展示作家を生年順に並べると次のとおりである。

A.ヤウレンスキー*、J.ヴィヨン、K.マレーヴィッヂ、C.カルラ*、N.ゴンチャローウア*、P.ピカソ、A.アーキペンコ*、G.セヴェリーニ*、M.デュシャン、M.シャガール*、G.D.キリコ*、J.ミロ、J.フォートリエ、H.ムーア、A.ジャコメッティ、海老原喜之助、S.ダリ)、W.D.クーニング、岡本太郎、松本竣介、ウォルス、G.シーガル、A.ウォーホル、M.ノイマン、池村玲子、J.ブラウン、北川健次、森村泰昌。以上28作家の作品42点(版画24、水彩ドローイング9、油彩6、立体3)を収録展示することになった。

M.ノイマン以下5名の作家は30~40才代の新進気鋭の作家で新しいエネルギーを感じさせる。モダンクラシックの作家の作品との対比でどうみえるか?面白いところである。なお、*印の7点の作品はパウハウス・マッペ第4集、ロシア・イタリアのグラフィック1922年刊(11作家11点の作品を収録)に収められているものであることを申し添える。画廊スペースの関係上、一度に全作品を展示することは無理があるので会期中に展示替えを行わざるを得ない。この点ご了承いただきたい。

ところで、来年3月、当画廊の現代人物肖像画展の作家作品をモチーフにした画文集「ヒューマン・イメージ」(仮題)が鶴岡善久氏の責任編集で沖積社から出版の予定である。去る6月15月、鶴岡さんと沖山さん(沖積社社長)が来廊され、現代人物肖像画展に出品された作家作品について、当代の詩人、歌人、画家、彫刻家、文学者、評論家の諸氏にエッセーを寄稿していただき、画文集を作成したいという申出があり、協力を求められた。沖積社なる出版社の名前は知っていたが、沖山さんとは初対面である。その沖山さんが9冊のカタログ—それもカバーがキチンとかけてある—を持参されたのには驚いた。いやあ、見られてるな、こわいな、という思いが私の頭をよぎった。と同時にこの現代人物肖像画展を評価していただいていることを知ってうれしかった。私は即座に両氏の申出を了承し、作品の写真を提供する等協力を約したのである。この画文集に収録される作家は多彩であるが、執筆者はもっと多様でヴァラエティに富んでおり、面白い本になりそうで今から楽しみにしている。因みに予定さ

れている作家と執筆者(一部再録を含む)は次のとおりで、テーマとなる作家は38名、執筆者は39名に及ぶ。これは壯觀である。

F.ベーコン：近藤春彦、バルチュス：阿部良雄、H.ベルメール：窪田般弥、J.ボイス：東大寺乱、J.C.ブレ：難波英夫、J.コーネル：北川健次、S.ダリ：利根山光人、P.デルボー：田中清光、J.ダイン：渋沢孝輔、J.デュビュッフェ：寺田透、M.デュシャン：千葉成夫、M.エルンスト：詩・吉岡実、大岡信、J.フォートリエ：日高てる、サム・フランシス：馬場駿吉、A.ジャコメッティ：樋口覚、R.ハミルトン：辻征夫、D.ホックニー：山崎勉、H.ヤンセン：吉岡弘昭、P.クレー：岡井隆、Y.クライン：天沢退二郎、G.クリムト：小柳玲子、W.D.クーニング：金閔寿夫、F.レジェ：飯田善国、R.リキテンシュタイン：新井豊美、R.リンドナー：田野倉康一、マン・レイ：鶴岡善久、H.マチス：安藤元雄、J.ミロ：津高和一、H.ムーア：和田徹三、M.ノイマン：水沢勉、E.ノルデ：大熊敏之、F.ピカビア：塙原史、P.ピカソ：佐藤朔、G.シーガル：桑原住雄、トワイアン：朝吹亮二、J.フォス：山口勝弘、A.ウォーホル：日向あき子、ヴォルス：柄沢斎

さて、ここで今年の当画廊のしごとなどを振り返り、最近、強く感じている現代美術館建設の問題、昨今の美術品ブームについて所感を述べるとともに、来年の企画展に触れておきたい。別紙の佐谷画廊企画展：1989年実績、1990年予定をご覧いただきたい。今年も企画展10展をこなし忙しい年であった。当画廊も画廊開設以来11年を数え展覧会の回数は通算するとこの第10回現代人物肖像画展で104回目となる。丁度100回目が6月の山田正亮展であった。カタログも今回で78冊を数える。数が多くはよいといふものではないことは充分承知しているが、それにしてもはるばるとやってきたものである。

今年は春秋2回、女房とともに欧米を旅した。2月16日から3月4日まで、ニューヨーク、ロンドン、パリ、ベルン、バーゼルを廻り、アラカワ、桑山、クリスト、フォスの諸作家に逢い、アルプ、マン・レイの展覧会のため関係画廊と話し合った。特筆すべきはベルンでフェリックス・クレーさん(パウル・クレーの息子さんである。)にお逢いしたことである。来年1月に開催予定のクレー展についてあいさつし、当画廊所有のクレーの作品についてチェックしていただき、そして四部屋に飾られているクレーの作品をみせていただいたのはうれしいことであった。

秋は9月21日から10月9日まで、西ベルリン、東ベルリン、ミュンヘン、ケルン、デュッ

セルドルフ、アントワープ、ニューヨーク、シカゴ、ヒューストンと急ぎ足の旅であった。西ベルリンではブルスベルグ氏の案内で、ピーチ氏のシュルレアリスム系の絵画を中心とする優れたコレクションを見る機会を得たのは印象的であった。東ベルリンを初めて訪問したが、壁ひとつの違いで、かくも異なる空気の違いに、異なる政治体制の意味を感じざるを得なかった。アントワープのミデルハイム野外彫刻公園で開催中のわが国の彫刻展(峯村敏明氏の編成)で戸谷成雄、中原浩大の作品をみた。そこで偶然、山口勝弘さんに出逢ったのも忘れ難い。山口さんはアントワープの現代美術館で開催中の日本ビデオアート展のために来ておられたのである。一日、ブリュージュとゲントに遊んだが、ブリュージュの風景は心を洗われるような静かな美しさで、久しく失ってしまっていた人間的な時間を取り戻したような素直な気持になったのは収穫であった。

ニューヨークではMOMAのピカソ、ブラックのキュビズム展が圧巻であった。これを見るだけでNYへ来た価値がある。その会場で斎藤義重さんにお逢いしたのは驚きであった。ヒューストンのメニル美術館はセザンヌ以下現代美術の質のよいコレクションで感心した。サイ・トンブリー展を開催中で次回はマックス・エルнст展という。同行した女房の記録によるとこの旅で訪問した美術館は20、画廊16を数えたという。作家にはクリスト、アラカワ、桑山の皆さんとそれぞれ夕食をともにし歓談し得るところが多かった。

これらの旅で強く感じたことを2、3申し述べておきたい。第一は、わが国と欧米諸国の経済力と現代美術館の関係について、これが余りにもアンバランスである点である。欧米の主要都市の空港に降りて、自動車で中心部に向かうとわが国の巨大企業の広告が目立つ。ソニー、日立、キャノン等々枚挙にいとまがない。わが国の経済大国振り、ジャパンマネーの威力を如実に物語っている。このこと自体大変結構なことで、私は誇りに思っている。ところが、それらの都市にある現代美術館の問題となると話は別である。これらの都市、例えばベルリン、ミュンヘン、ケルン、デュッセルドルフ、シカゴ、ヒューストン等、東京に比べると著しく小さい都市に内容の充実した現代美術館がある。ところがわが国の国際的大都市東京には誇るに足る現代美術館がない。モダンクラシックからコンテンポラリーの現代美術を系統的に質をそろえて常陳している美術館がないのである。この事実は、どう考えてもおかしい。経済一流、文化三流というアンバランスは何とかならぬものかといらだたしい思いである。

第二に、コンテンポラリーの作品について欧米の主要美術館で、わが国の作家の

作品を殆どみない、という事実である。この秋の旅行で、荒川修作の作品をシカゴ・アート・インスティチュートで、池村玲子の作品をデュセッルドルフの美術館でみたほか、ついぞお目にかかるなった。それも2人とも外国で制作している日本人作家である。これでは日本には現代美術がないと思われても致し方ない。甚だアンバランスで淋しいことである。現代美術の輸入ばかりで輸出は皆無に近いというわが国の状況は何とも不思議な話である。つまり、この部門に限って言えば、わが国は未だ幕末的状況にある。戦後45年経った現在、美術関係者の各分野、各レベルで検討すべき重要な問題であろう。

ところで、ここで視点を美術品の「輸入」に変えて感ずるところを述べたい。次表をご覧いただきたい。

絵画輸入額の推移

年度	輸入額(百万\$)	同円換算(億円)	倍率
1985	132	191	1.0
1986	313	454	2.4
1987	884	1,282	6.7
1988	1,846	2,677	14.0

注) 1988年度貿易統計(通関ベース)、円換算@145

すさまじい輸入額の増大である。1988年度は今年の4月から消費税が課税されることもあり、駆け込み輸入があつたことを考慮しても大変な急増振りである。この2、3年のわが国の美術ブームがいかにすさまじいものであるか、この数字が端的に示している。同時にジャパン・マネーの威力も見事に示されていると言えよう。1987年3月のクリスティーズ(ロンドン)のオークションでわが国の大企業がゴッホの「日暮れ」を58億円で落札したことは今なお記憶に新しいところであるが、あのあたりから美術市場の状況が変わってきた、とみてよい。

問題は輸入美術品の内容いかんである。内容について調べたわけではないので、推測であるが、印象派、エコール・ド・パリの絵画が中心と考えられる。そうだとすると、残念である。コローは生前6千点の絵を画いたが、アメリカにはコローの絵が6千点ある、という有名なジョークがある。第一次、第二次大戦の戦勝国で経済大国になったアメリカがドルの威力にまかせて美術品をヨーロッパから買い漁った事情を痛烈に皮肉っている。いまわが国の経済状況はかつてのアメリカに近い状況にある。ユトリロは生涯○千点の絵を画いたが、日本には同数のユトリロがある、などというジョークが流布しないようにしたいものである。

むしろ、この際、巨大なジャパン・マネーにものを言わせ、経済大国の威信にかけて、現代美術の名品を片っ端から買ったら面白いと思う。まだ買い方が足りないのでないか。問題は何を買うか、である。チマチマした作品はやめるべきだ。現代美術史の本流に沿って、ビックネームの作家の優品のみをターゲットに絞るべきであろう。ビックネームの作家の名前にはまけて、その三流、四流の作品を、予算の関係もあり、求めるというのはまずい。その様な作品を展示するのは当事者の自己満足になってしまふ側にはむしろ有害な場合もある。そして現在わが国の現代美術館に欠落している部分、一例えれば、ピカソ、ブラックのキュビズムの大作等を早急に購入したいものである。わが国の大企業がコロンビア映画やニューヨーク市のロックフェラーのビルを購入する時代である。それと比較すれば、それほど驚くべき話ではない。腹にドシンとこたえるモダンクラシックの名品を常陳している現代美術館の建設が今こそ望まれる。その資金的な裏付も現在のわが国には充分存在すると思われる。問題はその方法論であろう。一国の美術文化水準を上げるためにには、優れた作品を常時みることにつきる。そのためには、大型の現代美術館の建設は目下の急務なのだ。

最近気になることのひとつはこの1~2年の美術市場のフィーバー振りである。このたびの旅行でもそのことを肌身で感じたが、全世界的な傾向である。フィーバー振りを示す例にはこと欠かない。前述の美術品輸入額のデータもその一つである。内外の公開、非公開のオークション、交換会におけるその出来高の増大、エスティメート価格を大巾に上廻る落札価格等もその例証である。最近のニューヨークではこれはという優品を買おうとする場合、その猶予期間が著しく短縮されてきた、と私の親しい同業の友人は言う。24時間以内に諸否の返事をほしい、と言った調子である。これでは即断するのと同じである。また、私と親しくしているヨーロッパの画廊が、ある優品について私に当初提示した価格を、三週間後に購入したいと申し入れると、まことに申し訳ないが価格を変更させてほしいとしてほぼ50%増の価格を再提示されたのには驚いた。その間にパリのファックがあり、そこで価格を再検討せざるを得ない状況が生じたようで、最初の提示価格をその時そのまま承すればよかつた、と思ったが、後の祭りという次第であった。

最近、美術品が投機的な商品となり、作品の質を度外視して、ビックネームだけで買う動きがみえるのは困ったことである。ネームだけで買う人は自分で所有するのではなく、(もし自分でコレクションをするのであれば、質の問題を避けて通るわけにはいかない)

いはずだ)転売それも投機的転売を目的に買っている。また美術品は今後もその価格は上昇するという判断が背後にある。美術品も商品である以上それが投機の対象になることもあるわけで、それを防ぐ手立てはない。特に美術品の特性上、希少、個別、高額の商品であるから一寸したはずみで高値が高値を呼び、オークションなどで2人が競い合えばドンドン上る。しかしその様な状況で落札された価格がオークションの場であることを理由に正常な価格であるとは言えない。作品が少ない、ほしい人が多い、かね余り、金利はやすい、景気もいい、美術品はまだあがる、と言った諸要素が絡み合い相乗効果を発揮した結果がこの美術品ブームを生んでいる。逆に、これらの諸要素に逆の変化が起れば、ブームは去る。

いや、まあ何とも索漠たる気分である。美術への愛などという言葉はどこかへ吹き飛んでしまいそうな気配である。価値あるものが正当に評価されて値段が高いというのは自然なことでうれしいことだが、つまらぬものが値段だけ高い、というのは気に入らない。いやな世の中である。諸般の状況からみて美術品ブームはまだ続くであろう。まあ行くところまで行って、いざれは落ちるということであろうか。われわれは1973年に一度それを経験している。その後12~3年沈滞した状況にあったことを忘れるわけにはいかない。

となると、差し当り、原点に戻るのが肝要である。質の良い美術品を求めるここと、これに尽きる。値が高いから質も高いのではなく、質が高いから値も高いのである。安もの買い物の錢失いでは話にならないが、高ければ間違いないとする態度は安易であり、自分自身の考えがないことの裏返してある。質の良否の判断こそ、現在美術関係者に求められている最大のしごとである。そして美術品の最終需要者の日の確かさ、行動のかしこさが今求められている。その確かな日を養うためにも常に名品が見られる筋の通った現代美術館がどうしても必要なのだ。

次に1990年の企画展について触れておきたい。新春早々1月10日から3月10日までパウル・クレー展を開催する運びとなった。これら作品は3年がかりで収集した当画廊のコレクションを中心に28点展示するもので、来年は奇しくもクレー没後50周年に当る。(クレーは1940年6月29日に死去している。)

私の美術開眼はクレーである。昭和22~3年頃、金沢の四高の学生であった私は美術雑誌で粗末なカラー写真のクレーの作品を見て感動したものである。飽かずは何回も眺めた情景を今もなつかしく思い出す。現在の画商という私の立場から、クレ

一展が出来れば、と秘かに思っていたが、今回ようやくその機会を得て、感慨無量である。質量とも当画廊オープン以来の空前の展覧会となった。

今回のカタログは2冊、刊行することとした。一冊は通常のカタログ、と言っても詩：大岡信、評論：土肥美夫、水沢勉の各氏の力作が収録されているので、何時ものカタログとは内容の厚味が違うのであるが。そのほか別冊として瀧口修造：パウル・クレー論集を刊行することとした。瀧口先生はクレーを敬愛され、クレー論を何編か書いておられることは私も知っていた。ところが調べてみると、生前詩一編、エッセー十三編を残しておられることが分かった。予想以上に多いのである。しかも第一作のエッセーは1940年3月に「アトリエ」に寄稿されたもので、クレーの亡くなる3ヵ月前であるのも不思議な因縁と言わざるを得ない。これらの調査は私の若い友人で瀧口修造先生に深く傾倒している土渕信彦さんの尽力によるものである。そこでこれらの詩、エッセーに、未発表の瀧口修造訳：パウル・クレーの詩、論文を加え一冊の本にまとめるとした。著作解題は土渕さんが健筆をふるわれ、クレーを通しての瀧口像が自然と浮び上るユニークなエッセーを寄稿していただいた。近く刊行が予定されている瀧口修造著作集：みすず書房のワンステップとしての意味も大きいと思う。すなわち、このパウル・クレー展は当画廊が毎年7月瀧口先生の命日・月に開催している恒例のオマージュ瀧口修造展の番外編となった。

クレー展に次いで3月は池村玲子展である。池村さんは現在ケルンで活躍している女流作家で、わが国での個展は初めてである。5月の桑山忠明は長らくニューヨークで活躍しておられるヴェテランの作家で、東京での新作展は久し振りで楽しみにしている。6月は新進の小林正人、7月は恒例のオマージュ瀧口修造展でミロを予定している。9月はここ数年精力的に作品を発表されている戸谷成雄で、新作が期待される。

10月は山田正亮新作展で、この展覧会は山田正亮画集刊行記念展となる。現在、来年9月美術出版社から出版の予定で鋭意準備中である。初期の静物画からこの10月展に出品予定の大作まで約400点の作品がカラーで収録される。テキストは東野芳明、本江邦夫、早見堯の三氏、写真は内田芳孝、編集は椎名節の諸氏である。展覧会画集とともに楽しみなことである。

11月はクリストで、初期の作品(罐をラップした作品等)を中心に展示の予定である。1991年10月に完成予定で現在進行中のアンブレラのプロジェクト(茨城県常陸大田市周辺に1,300本のブルーのアンブレラ、ロサンゼルス市近郊に1,700本の

イエローのアンブレラを建てる。アンブレラの直径は8m、高さは6m。)は日米とも順調に推移しているときいている。成功を祈るや切なるものがある。

話は前後するが、当画廊に関係の深い作家が、今年の各地の主要な展覧会に選ばれて作品が展示されたので記しておきたい。

1「ビエンナーレ・ミデルハイム・ジャパン」展

ミデルハイム野外彫刻美術館(アントワープ)

戸谷成雄、中原浩大

2「ドローイングの現在」展

国立国際美術館

池村玲子、小林正人、辰野登恵子、山田正亮

3「色彩とモノクローム」展

東京国立近代美術館

池村玲子、小林正人、鈴木省三

このほか、山口勝弘がアントワープの現代美術館「ビデオアート」展に、戸谷成雄がケベック美術館(カナダ)、サンタバルバラ美術館(イタリア)、埼玉県立近代美術館「アートエキサイトング」展に、辰野登恵子がゲントの現代美術館(ベルギー)「日本現代美術展」にそれぞれ出品された。さらに一層のご健闘を祈るものである。

最後に、来年もビッシリと忙しい年になるが、慎重かつ果敢にしごとを進めて参りたいと考えている。皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

1989年11月8日

佐谷画廊

佐谷和彦

追記 11月11日

この文章を書いた後、11月10日付の夕刊を見て驚いた。ベルリンの壁が消滅するという。40日前に東ベルリンを訪問したばかりの私にとってはことのほか驚きが強い。1989年11月9日は記念すべき歴史的な日となった。クリストのライヒスタークのプロジェクトはこの事件によってその達成に好影響を及ぼすであろう。